（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和４年度　海外派遣研究員研究報告書

令和　6年　5月　16日

日本大学理事長　　殿
日 本 大 学 学 長　　殿

所　　属　　芸術　　学部（芸術研究所）
資格・氏名　　教授・久保陽子

☑本報告書の内容を公表することは，了承しております。
☐本報告書の内容を公表することは，差し控えください。

令和　4年度海外派遣研究員（　長期　）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

1　区　　分　　長期

2　研 究 課 題

英国式“picnic”の発展をめぐる文化芸術と文学表象，および社会史的現在に関する研究

3　派 遣 期 間　　西暦　2023　年　3月　21日　～　2024　　年　3月　20日

4　派　遣　先　　英国・アイルランド

5　研 究 目 的

18世紀半ば英国の上流階級では、フランスからもたらされた「ピクニック」が大流行し、19世紀初頭の1801年には「ピクニック・ソサイエティ（Pic-Nic Society）」が設立された。英国にはそれ以前から、貴族階級を中心として狩猟の際に戸外で昼食を取る習慣があったが、より幅広い社会階級の人々にとっても、18世紀の産業革命に伴う都市部の大気汚染、人口増加による生活環境の悪化などから逃れるために、郊外の自然の中で休息を取る文化が広がった。英国各地への鉄道が延伸されレジャーとしての旅行が容易になったこと、公共公園の整備がなされたこと、ナショナル・トラスト運動が広がったことなども、背景的な要因となっていた。

本研究では、こうした「ピクニック」が20世紀以降に市民が気軽に参加できる一般的な余暇として広がり、まさに階級横断的且つ老若男女がそれぞれに興じる総合的な文化芸術として発展していく流れを、現在に至るまでの英国史の中で再評価することを目的とする。英文学を専門とする筆者だが、本研究は、広く文化史・社会史研究の中で、ピクニックを現在に至るまでの系譜の中で捉え直そうとする試みである。

（ 様式D－２ ）

６　研　究　概　要

①研究の方法

「ピクニック」の歴史については、ジョージアナ・バティスコム(Georgina Battiscombe) の *English Picnic*（The Harvill Press Limited, 1949）や、「食文化史」における「ピクニック」現象の分析を行った Walter Levy の *The Picnic: A History*（Rowman & Littlefield, 2014）に詳しい。今回の海外派遣研究期間においては、これらの先行研究を踏まえ、受け入れ機関の英国ケンブリッジ大学（University of Cambridge）の英文科（Faculty of English）とウルフソン・カレッジ（Wolfson College）において、以下の点に関して資料収集と関連施設訪問、関連学会への参加を中心に活動し、考察を進めた。

②渡航先での活動内容

（１） 同時代の別の文化現象・芸術産業との影響関係の分析。①英国式紅茶文化の登場と共に、陶磁器が貴族階級のみならず、一般庶民にまでいたる優雅な国民的紅茶文化の完成を担った点。②自然保護運動であるナショナル・トラスト運動が庶民のためのオープン・スペース使用権・通行権を求める環境運動でもあった点。③英国におけるアーツ・アンド・クラフツ運動において、「生活芸術」の思想がカトラリーやポット等を含むピクニックの道具の質やデザインにも影響していた点。これらと「ピクニック」発展の影響関係を考察する（英国内の関連施設を訪問し一次資料を収集)。

（２） 文学や絵画における「ピクニック」の場面の効果分析。文学における「食事」の場面は時に物語の発展に大きな影響を及ぼすことがある。とりわけ 19 世紀以降の女性作家（主にジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817））の作品における象徴的なピクニックの場面を取り上げ、「食」の行為が、必ずしも貴族社会と結びついた特権的な社交の場ではなく、一般的な「日常の社交」としてどのように機能していたかを探る（受け入れ先機関での研究、及び英国内各種研究施設での学会等に参加）。

（３） 現在の英国における「ピクニック」は、広く庶民の余暇として楽しまれているが、例えばロイヤル・アスコット（競馬観戦）といった王室が主催する優雅な祭典と共に行われることもある。また、ピクニック・メニューには「家政学の祖」と言われるイザベラ・ビートンの時代からの伝統メニューがある一方で、現在でもモダン・ブリティッシュの若きシェフたちが新メニューを考案している。加えて、昨今のコロナ禍によって余暇の過ごし方には変化が見られ、バケーションならぬ「ステイケーション（staycation; 近場で休暇を過ごす）」が流行っており、あらためて近場でピクニックを楽しむ動きが広がっている。こうした間口の広さを有する「ピクニック」研究の社会史的現在にも着目したい（英国現地でのピクニック事情を実地調査する）。

７　研究結果・成果

（１） 英国内関連施設の訪問と資料収集

1. ジェイン・オースティンが暮らした温泉保養地のバース（Bath）にある The Jane Austen Centre、オースティンが晩年を過ごしたチョートン（Chawton）にあるコテージ Jane Austen's House Museum、およびその近郊のオースティンの兄が所有していたマナー・ハウスを改築した Chawton House Library で資料収集を行った。特に女性関連の貴重な書籍を多数所蔵する Chawton House Library では、司書から直接各書籍の説明を受けると共に、ピクニックに主軸を置いた 19 世紀女性研究の新規性について興味を示していただけた。

2. アーツ・アンド・クラフツ運動の基礎を築き、ピクニック道具のデザインにも影響を与えたウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）が幼少期を過ごしたロンドン（London）近郊のウィリアム・モリス・ギャラリー（William Morris Gallery)、オックスフォード（Oxford）近郊に構えた別邸ケルムスコット・マナー（Kelmscott Manor)、新婚時代に妻と５年間過ごしたケント（Kent）州のレッド・ハウス（Red House）をそれぞれ訪れ、家具や陶磁器の芸術作品に直に触れた。19 世紀以降、ピクニックの概念や活動が広まるにつれ、複数の異なるピクニックのあり方が様々な国と場所で生まれてきたが、第二次世界大戦後の時代になると、スーパー・マーケットが登場し、コンビニエンス・フードが安価になり、プラスチックや紙製の食器も登場するなど、使い捨て文化を前提とするピクニックのスタイルが生まれた。フォートナム＆メイソンのピクニック・バンカーなど、ピクニックに伴うグッズも流行した。「ピクニック」は、時代や国、あらゆる事象をも超えた、文化的フュージョンの象徴であり、モリスが目指した「生活の芸術化」という側面を持つと考えることもできる。今後考察を進める。

3. 産業革命時の英国で 1895 年に３人の活動家により設立された「英国ナショナル・トラスト（National Trust)」の会員になり、歴史的建造物や自然的景観が残る、主にマナー・ハウス（Manor House）やカントリー・ハウス（Country House）と言われる邸宅を訪問した。ウィンポール・エステート（Wimpole Estate)、アングルシー・アビー（Anglesey Abbey）などである。これらの邸宅にある、使用人たちが生活した地下や別棟では、当時の料理本やレシピのメモ書きなども残っていた。これら私的なボランティア団体の「ナショナル・トラスト」管理施設とは別に、英国政府が設立した「イングリッシュ・ヘリテッジ（English Heritage)」の管理下にある施設も訪れた。例えばサフロン・ウォルデン（Saffron Walden）という小さな町にある、ジェームズ一世（James Ⅰ, 1566-1625）の時代に築かれたジャコバン様式のマナー・ハウス、「オードリー・エンド・ハウス（Audley End House)」では、建設以来その時々の当主が流行を取り入れて改装を繰り返し、贅を尽くして見栄を張り続けた形跡が見られた。

オースティンの『エマ』（*Emma, 1816*）に出てくる有名なピクニック・シーンの舞台であるサリー（Surrey）州のボックス・ヒル（Box Hill）では、Frost Fair のイベントに参加した。ボックス・ヒルは自然景観が美しいことで知られ、今でも多くの観光客が訪れるナショナル・トラストの施設であるが、ダニエル・デフォー（Daniel Defoe, 1660-1731）などによる 17 世紀以降の旅行記等を調査したところ、この地は、鬱蒼と茂った木々の影に隠れて若い男女が逢瀬を重ねる場所でもあったという。このことは、ジョージ・ランバート（George Lambert, c.1700–1765）が描いた *A View of Box Hill Picnics* (1733)の絵画にも見て取れる。美しい自然を堪能しながらピクニックに興じる紳士たちの一方で、茂みで抱き合う恋人たちや、猟犬と共に駆ける使用人もが描きこまれたこの絵には、当時の社会階級の緊張関係が反映されていると同時に、ボックス・ヒルがそうした緊張関係を融合し共存させる「公共圏」であったことが考察できる。

（２）受け入れ先機関での研究、及び英国内各種研究施設での学会等に参加

1. 所属したケンブリッジ大学図書館とウルフソン・カレッジ図書館での資料収集は本研究を大いに推進してくれた。特にウルフソン・カレッジには、名誉フェロー（2002 年）のカレン・スパーク・ジョーンズ（Karen Spärk Jones）による、女性に関する、または女性による、貴重な本のコレクションがある。カレン・スパーク・ジョーンズはインターネット検索エンジンの基礎を築いた女性としてよく知られる科学者だが、19 世紀の教育者や料理作家などの人文学系の貴重なコレクションも有しており、カレッジが誇る女性研究の一端に触れることができたのは大変貴重な経験だった。所蔵の料理本の中には、19 世紀にピクニック・メニューを紹介したイザベラ・ビートン（Isabella Beeton, 1836-1865）以前の料理研究家たちのレシピ本もあり（例えば、ピクニック・メニューに欠かせない「スコッチ・エッグ（Scotch Eggs)」のレシピを出版物の形で最初に紹介したという Maria Rudell(1745-1828)の *A New System of Domestic Cookery: Formed upon Principles of Economy; and Adapted to the Use of Private Families* (London: John Murray, 1821, First Published 1806)や、実際の調理を行う使用人への指示の仕方やフランス料理からの影響なども記した Hannah Glasse(1708-1770)の *The Art of Cookery Made in Plain and Easy* (London: A. Millar, post-1758, First Published in 1747)など)、ピクニックの系譜を「食」や「調理」「作法」の面からも考察していく足掛かりを得られた。

2. 2024 年 1 月 3 日～5 日にオックスフォード大学のセント・ヒューズ・カレッジ（St Hugh's College, University of Oxford）で開催された、「英国 18 世紀学会（BSECS (British Society for Eighteenth-Century Studies))」の第 53 回年次大

会に参加した。今年の大会テーマは‘Work and Play’であったが、この‘Play’には‘Leisure’の意味合いがあるため、訳語をつけるとすると、「仕事と余暇」となる。本研究者は、英国で 19 世紀以降に発展した大衆的な余暇活動の一つ「ピクニック」の萌芽とその後の発展への寄与が 18 世紀後半以降の女性作家の活動（主にジェイン・オースティンとドロシー・ワーズワス）に認められることを指摘し、「植物と自然（Botany and Nature)」と題したセッションにおける 4 人のスピーカーの一人として選出された。このセッションにおいて本研究者は、‘Leisure and the Culture of ‘Picnic’: Revisiting the ‘Picnic Scene’ in Jane Austen’s *Emma*’ と題した口頭発表を行い、リージェンシー時代（Regency Era,1811-1820）の社会的・文化的背景を踏まえた上で、ピクニックの表象が単なるレジャー活動を超えたものとしてどのように進化してきたかを探求し、ボックス・ヒルでのピクニック・シーンにオースティンが込めた、愚行と散財で知られた摂政皇太子（Prince Regent、後のジョージ 4 世（George Ⅳ, 1762-1830)）への批判精神を明らかにした。セッションの司会を務めた本学会会長でもある Oxford University の Prof. Brycchan Carey からは、ジョージ 4 世が、自身の誕生日を祝う 1811 年 8 月 12 日に、イースト・サセックスにあるベクスヒル（Bexhill）で行った戸外でのパーティーと、オースティンの『エマ』におけるピクニック・シーンを対照させて考察した本研究者の着眼点を評価していただけた。他にも、本学会を通してお世話になっている Kingston University の Dr. Karen A Lipsedge には、帰国後も MS Teams での定期的な meeting を通して、本研究に対する有意義な指摘や助言をいただいている。

（３）英国現地でのピクニック事情の実地調査

英国には、10 数年前に始まった年 1 回開催の「ナショナル・ピクニック・ウィーク（National Picnic Week）」が設定されており、2023 年は 6 月 17 日から 25 日だった。「ピクニック・ウィーク」とは別に、英国では毎年 6 月 18 日に設定されている International Picnic Day もある。現代の圧倒的な人気の背景には、「ピクニック」のグローバル化があることは見逃せない事実だが、同時に、国内での根強い伝統もあり、その実態を確認するためにいくつかのピクニック・スポットを訪ねた。

例えば、本研究者が滞在していたケンブリッジから少し南のケム川沿いにあるグランチェスター(Grantchester)は、ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf, 1882-1941）をはじめとするブルームズベリー・グループ（The Bloomsbury Group）のメンバーや戦争詩人のルパート・ブルック（Rupert Brook, 1887-1915）など、数々の文豪や学者をはじめ、その他多くのケンブリッジ大学生が好んで訪れたという有名な地である。その歴史的資料の展示を見に訪れる研究者と共に、今もピクニック・スポットとして知られるオーチャード・ガーデン（Orchard Garden）には、スコーンやサンドイッチと共に気軽なアフタヌーン・ティーを楽しむ人々で賑わっていた。

（ 様式D－２ ）

「ナショナル・トラスト」の保護区として最も有名な湖水地方（Lake District）では、この地をこよなく愛したウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）の博物館（Wordsworth Museum）と彼が妹と 1799 年から 1805 年まで住んだダブ・コテージ（Dove Cottage）を訪れ、山歩きや戸外の食事を楽しんだ妹ドロシー（Dorothy Wordsworth, 1771-1855）の足跡を追った。彼女の足跡を辿る中では、彼女と同じく「ピクニック」の概念が流行する以前から戸外の食活動を行っていた旅行家兼ガヴァネスのネリー・ウィートン（Nelly Weeton, 1776-1850）や、子供たちの School Excursion と戸外の食活動について言及し、日曜学校の設立に携わったハンナ・モア（Hannah More）の資料を見つけた。

英国競馬の発展に寄与した競馬場の一つ、ニューマーケット（Newmarket）では、馬の調教の様子を見学した。また、許可を得て Jockey Club Rooms に入室し英国王室とのつながりや支援の経緯等を確認した。英国王室が主催する競馬の祭典としては「ロイヤル・アスコット(Royal Ascot)」が有名だが、ニューマーケットは、リタイアした馬のセカンドキャリアを構築していることが特徴だという。また、各競馬場ごとに（例えばロイヤル・アスコットでは特等席の「ロイヤル・エンクロージャー」といったように）観客席や正装のルール、ピクニック・スペースなどには格式の差があるが、ニューマーケットの子連れ可のファミリー向けスペースではかなりカジュアルな観覧とピクニック・ランチを楽しむことができ、まさに階級横断的な国民的イベントとなっている。

ロンドンにある英国王室御用達のフォートナム＆メイソン（Fortnum & Mason）では、ピクニックが流行した 19 世紀に同社が開発したバスケット「ピクニック・ハンパー」の開発・発展と、その豊富なバリエーションを確認した。また、同店上階フロアに置かれていた Mary Hooper による *The Weekly Telegraph Cookery Book*（1890）や George Black.M.B.Edin による *A Manual of Vegetarian Cookery*(1908)などの貴重な料理本を確認することができた。

以上、本研究に携わった１年間、「ピクニック」をめぐる歴史や伝統、文学表象、および現在に通じる文化現象としてのあり方についての資料・情報収集を精力的に行うことができたが、それらのより入念な考察結果は、今後１～２年をかけて発表していく。最後に、2023 年春に開催された Cambridge Literary Festival にて登壇した、料理家ジャック・モンロー（Jack Monroe）とフード・ライターのヘンリー・ディンブルビー（Henry Dimbleby）の講演を聞いたことも、本研究に刺激を与えてくれたことを付記したい。モンローは、低コストでできる美味しい料理レシピをブログで紹介して大人気となり、その後、反貧困・飢餓救済を掲げて積極的に活動している。ディンブルビーは、レストランのレオン（LEON）共同設立者でありサステイナブル・レストラン協会のディレクターでもあるが、本講演では、現在の英国の食、農業、食事、健康の問題点を概観し、英国の学校給食の安全化と無償化に取り組んだこれまでの経緯や、特に恵まれない子供達への食の提供を中心とした、国としての食糧戦略についての興味深い指摘をしていた。

以　上